

ケアする家族を地域で支え合う仕組みづくり

播磨靖夫氏 講演集

「ケアする人のケア」

播磨靖夫氏プロフィール

新聞記者を経てフリージャーナリストに

財団法人たんぽぽの家理事長。社会福祉法人わたぼうしの会理事長特定非営利活動法人日本NPOセンター前代表理事。平成 21 年度芸術選奨文部科学大臣賞（芸術振興部門）受賞。

みなさん、こんにちは。播磨と申します。奈良から来ました。奈良は大変寒くなってきましたが、宮崎も昨日は寒かったですね。空港を降りたら冷たい風が吹いてきて、宮崎もこんな寒いときがあるんだなとびっくりしました。そのあとおいしい焼酎をお湯割りいただきまして暖まりました。

今年もいろんなことがありました。特に東日本の大震災、天災と原発事故という人災で、日本も大変なことが起こったわけですが、私たちも今、支援活動を展開しております。

今日は、「ケアする人のケア」ということでお話をするわけですが、日本で初めてこういう研究をしたのが、私たちの「たんぽぽの家」であります。今日はそういうところからお話をしたいと思います。

元々、ぼくは福祉の人間ではありません。大学を出てすぐ新聞記者になりました。1960年代、日本が高度成長に向かっていく時代に、記者として仕事を始めたわけです。

日本はその時繁栄の道をまっしぐらでしたが、それから取り残されている人たちがいるということに気づきました。それは障害のある人たちのことです。そういう人たちが取り残されているまま、日本が豊かになるということはありません。こういう人たちに光を当てていくことが大事ではないかということで、障害者問題のキャンペーンをやりました。身体障害、知的障害、精神障害、これが縁で気がつけば落ちこぼれて、もの書きで生計を立てながら、一方で障害のある人たちの支援活動へ入ったわけです。

その頃は、まだ障害者に対する偏見差別が強くあって、取材をするのが困難でした。例えば自分の家に障害者がいるということを隠して、訪ねて行くと誰に聞いたのかとか、取材をしても、本名でなく仮名で書いて欲しい。写真も撮らないでくれ、後ろ姿だったらいいけども、正面は駄目だと、いろんなことを言われました。特に自分の家庭に障害のある子どもがいるとほかの兄弟、姉妹の結婚に差し支えるから、公にしてほしくない。そういう理由で取材拒否されました。

もっと悲惨なことは、奈良県の山の方ではまだ座敷牢のようなものがありましたね。障害のある人が地域に出ないように鍵を掛けていました。そういう時代に取材をして、障害のある人たちの何が問題で、どんなことを抱えて苦しんでいるのかということ伝えていったわけです。もちろん、当事者の方、あるいは家族の方の協力なくしては出来なかったんですが。

その当時、画期的なことやったんです。アンケート用紙を作りまして、家族のみなさんに配って、どういう状況に置かれているのか。経済的な負担はどういうものか。誰が世話をしているのか。家族でもいろいろありますね。お母さんなのか、お父さんなのか、兄弟なのか、祖父母なのか、そういう調査をしたんです。それを基にしていろんな記事を書いていったんです。

胸を痛めたのは、家族の中でも母親にもものすごく負担がかかっている。一家の母親としての負担もかかっている。そういう母親の苦労というのをその時に知ったわけです。障害があ

る子どもを中心に動くから、家庭内がうまくいかないというようなことで、離婚をする家族もありましたし、またお母さんが蒸発してしまって、行方不明になるということもありました。一番悲しい思いをしたのは、障害児を殺して自分も死ぬという親子心中が、毎年のように新聞で大きく報道されるということです。

そこで障害のある人たちが安心して暮らせる自立の家づくりというのを始めたんですが、それは障害のある人だけじゃなくて、親の介護、介助の負担を軽くして、自分の人生を歩めるようにすることも、非常に大事じゃないかと思ったわけです。

自立の家づくりは、運動を始めて8年後に最初のものができるわけです。その後、地域交流施設、最後は福祉ホーム、ケアが付いていて、障害のある人たちがそこで1人で生活出来るような集合住宅をつくって、3次計画で終わった時に、「ケアする人のケア」を研究していこうということで、1999年から始まったんです。

研究というのは学者、研究者の仕事だと思われていたんですが、私たち市民も研究してもいいんじゃないか。特に介護、介助されている方は、実践知と言いますか、実践の中でのすごくいい知識を持っておられる。これを活かすこともあってもいいんじゃないかということで、市民研究という形でスタートしたわけです。

特に障害がある人の家族、あるいは福祉職のケアの問題ですね。こういう福祉施設で働いている人たちも、肉体的な負担とか精神的なストレスもあって、大変なきつい仕事であるうえ、給料も安い。こういう人たちのケアの問題も研究しよう。それから、ボランティアの人も一生懸命がんばってたら燃え尽きてしまうんです。それも研究しようと、この「ケアする人のケア」の研究が始まったわけなんです。

こういう「ケアする人のケア」を研究しだして、これまでよりも見る世界が開いたような感じがしますね。何が開いたかと言うと、人間に対する見方がずいぶん変わってきたんです。ケアというのはそういう深いものであるわけで、そういう話を今日はしたいと思います。

まず今私たちが生きている社会のことからまいりたいと思います。

今日本の社会は、ほんとに生きにくい社会だということです。これまでの時代では考えられないことが起こる。地震とか原発事故、天災・人災みたいなものもありますけども、むしろ人間の世界で起こる。

この前、埼玉と千葉で少女が少年に刺されるというのがありました。あのニュースで聞いた時、神戸の少年Aがまた復活したのかという思いがしました。誰でもいいから殺したいということです。こういうことは、今までなかった。神戸の少年Aの事件は酒鬼薔薇事件と言いますね。あの時はびっくりしました。少年がこういうひどいことするのかと驚いたんですけども、また、そういうことがありました。

さらに、自分の子どもとか赤ちゃんを虐待死させるということ。子は宝ですよ。かつてはみんな大事にして育ててきたわけですね。ところが、虐待して殺してしまう。これまでの日本では起こらない事件が相次ぐ。もっと大きなことは、自殺者が連続13年、3万人を超えてい

るということですね。最近では毎年3万人を超えているからもう当たり前のようになっているんです。これは悲しいことなんですね。日本は今、生きづらさを感じながらみんな生きている社会になってしまっている。

さてこの生きづらさはどこから来ているのか。そういうことを突き止めることによって、この社会を生きやすい社会に変えることが出来るんじゃないかと思うわけです。

今日は、まずそこから話をしたいと思うんです。

ぼくより年長の方もおられますので、日本の戦後の話から始めたいと思います。

日本は敗戦になって0からのスタートです。その時に、こうありたいという社会目標を立てたわけです。戦後の荒廃から復興するための目標です。

その1つは、物質的な満足ということ。ものがいっぱい社会にあふれたら、それが幸福になるということ。もう1つは、快適さの追求。

物質的な満足と快適さの追求。この2つが社会目標になったのですね。

まず物質的な満足。テレビ・冷蔵庫・洗濯機、これ三種の神器と言っていました。これを普及する。つまり各家庭が持つことを目標とした。で、どこの家も競ってテレビを購入した。我が家にテレビが来たのはぼくが高校生の時でした。他の家はみんな普及しているんですが、うちの親の方針は、高校へ行くまでテレビを見てはいけない。テレビがない方が一家の団らんもあるから、テレビは駄目だと。日本シリーズなんか見たくて、隣の家で見せてもらって、前の方でかぶりついて見ていました。

その三種の神器が家庭に普及したあとは、クーラーとかオーディオ。いわゆる家電化が進みました。そして、それは個電になっていったんですね。テレビも、みんな自分の部屋で好きな番組を見て。1家で1つのテレビ見てプロレスで興奮する時代は終わってしまった。

そして、そのあとがモータリゼーション、車社会が到来して、今、この宮崎では1人1台じゃないですか。1家に1台じゃなくて、1人に1台持っているという時代がきたわけです。

こういうふうに、物質的な満足を次々と実現させていったんです。別の言い方をすれば、人間の欲望を次々とかなえていったんですね。いろんなものを犠牲にしても、ものの豊かさのために生活をしてきたという時代です。国の政策は過度の経済優先。あるいは、効率主義。それで高度成長をして、その結果、ものが溢れる生活が実現したわけです。

ところが、生活水準がどんどん上がっていったけれども、多くの人たちはほんとに豊かさを感じてない。ましてや、幸福とは感じられない。言ってみれば、ものは溢れているけれども、何もないという、明るい絶望の中で日本人は今生きているわけです。

このあいだブータンの国王夫妻が来ましたね。イケメンとかわいい王女さんで、国内でブータンフィーバーが起こりました。あの国は、幸福度が国の柱なんですね。日本はGNP(国民総生産)が大きくなることをめざしてきました。最近中国に負けましたけど。しかしブータンはそうはしない。国民の総幸福量(GNH)が高いほどいいんだという。イケメンの国王とかわいい王女様だけじゃなくて、日本人は何か気がついたんですね。つまり、日本はこれだけりっぱに発展したけれども、幸福を感じられない社会になっているということに気づいた。

あのブータンフィーバーの後ろにある背景はまさにそこだと思っんです。

みんな気がついてる。ものだけが溢れても、ほんとに幸せなのか。人間関係は殺伐。隣近所の付き合いもあんまり無くなってくる。こういうことが、ほんとに幸福な社会なのかと、みんな感じ始めている。ブータンという国は仏教国なんです。その考え方は欲望をどんどんどんどん肥大化させていくと、人間の大切なものを無くすという、そういうところから、国民総幸福量の大きさを国を計っていきこうと、そういうふうに関断したわけなんです。

この欲望の肥大化が、何を起こしたかということを考えてみる必要がありますね。それは、あらゆる側面のつながりを関断したということです。

人間と人間、人間と自然、人間と社会、そして人間と大いなる存在というつながり。宮崎はそういう大いなる存在、つまり天の恵み、自然の恵みに対して敬意を表すという気持ちが、まだ残っていると思いますね、これは貴重なものですよ。東京とか大阪の都市生活者はそんなのありません。お金出して買えばいいという発想ですね。でも、この宮崎の精神文化のすごいところは、天の恵みに対して敬意を払うという文化が残っているところなんです。これは実は、支え合う地域づくりの1つの柱になるとと思いますね。

つまり、あらゆる側面のつながりを、この経済優先、効率主義で断ち切ってきた。そして人間はどうなったかと言うと、みんな孤立していつてる。また社会の活力が無くなっている。今日も宮崎の中心市街地の話をお聞きしました。橘通りもシャッターを下ろす店がどんどん増えてきて、人が歩いてないということなんです。これはさっきも言った、つながりを断ち切って人間が孤立し、そして社会全体の活力も落ちていつたということです。この原因は欲望の肥大化、つまり経済優先、効率主義が起こした現象であるわけなんです。

豊かな生活というのはどういうことかと言うと、経済だけじゃないんです。あらゆる領域の活動に関わる総合的なものであるわけなんです。こういうものをみんな経済成長の中で抑制してきて、これをもう一度取り戻すということです。

具体的に言えば、芸術・文化・医療・介護・介助・子ども・教育・環境、こういったものが経済の優先のために抑制されて犠牲になってきた。これをもう一度取り戻していき、そして新たな豊かさや楽しさを手にするように切り替える、これが今のポイントなんです。東日本の大震災が起こって、日本社会が気がつき始めていることです。

もう1つの社会目標、快適さの追求というのがあります。みんな快適さを追求してきた結果、日本はアメニティ社会を出現させたわけなんです。アメニティ＝快適社会ですね。

この社会は、3つのCからなっています。1つは comfort(快適)、もう1つは convenience(便利)、もう1つのCは clean(清潔)。このアメニティ社会というのは、基本的に快感の原則で出来ています。そこでは、不快、不便、不潔というものは排除の対象になる。都会でホームレスを少年が襲撃して、傷つけたりする事件がよく新聞報道で出ます。少年たちにとって、段ボールとか持ってうろうろしているホームレスというのは、不快、不潔な存在なんです。それで石を投げたり、暴力を振るったりして排除する。これがホームレスの襲撃事件なんです。

みなさんの学校で問題になっているいじめですね。いじめも実は、アメニティ社会の1つの

現象です。違った存在の子どもがいますね。ちょっとクセがある、例えば発達障害の子なんかもそうですね。じっとしてないとか、奇声をあげるとか、そういう子どもを見た子どもは、不快、不潔と感じて排除していく、これがいじめの現象です。そういうことが学校でも起きているということですね。

こうした考え方は、実社会あるいは学校社会だけじゃありません。今この現象は、家庭にも及んでいるということです。現在の家族に、不快な他者が同居している。例えば、子どもの虐待事件を見ますと、若い夫婦にとって子どもは不快な存在なんですね。究極は、泣き出したら簡単に泣きやまない赤ちゃん。パソコンのようにスイッチを押したら消えてくれたらいいんだけど、消えてくれないですね、泣き出したら。そしてどうしたらいいか分からない。で、暴力を加えるとか、投げ捨てたりするわけです。2009年に、奈良でもこういう事件がありました。5歳の子どもが餓死した事件。両親は逮捕されたわけですけども、そのお母さんが言ってることがすごいんですね。ストレスのはけ口で子どもに食事を与えなかった。子どもをストレスのはけ口にしているんです。5歳の子どもは、発見された時は、普通の子どもの体重の半分しかなかった。それで死んでいったんですね。今では、やかましいから子どもを投げ捨てて虐待したとか、殺したとか、毎日のように出てくる。これはまさに不快な他者、赤ちゃん、それから子どもが、家庭内にいる状態。それが虐待や殺人に繋がっている。そういう事件が続発しているということなんです。

ちなみに、熟年夫婦にとって不快な他者は誰でしょう。それは妻にべつとりまとわりつく、定年後の夫であると言われていたんですね。子どもの話をしたら、定年退職した夫を持つ主婦の方が、夫も大変ですよと言うんですね。妻が外出しようとしたら、どこに行くのか、何時に帰るのか、しつこく聞く。で、買い物行くとしたら、スーパーまで付いて来る。定年後やることがないから、テレビを見て、何かぶつぶつと言ってる。こんな光景を恐れて、定年離婚が増えているということです。

今、よく受ける相談は、夫婦の会話をどうしたら出来るのかという、おかしな話です。子どもがいた時は、結構会話をしていたと言うんですが、子どもが育っていなくなった途端、会話がなくなりましたよ。まあそれはそうですね。古い年代の男性は、仕事から帰って来たら、お茶、風呂、メシというだけです。子どもがいるからまあまあ繋がったということもあるけれども、もうそれもないので、どう会話をしたらいいのか。そういう男性の方からの相談が多いんですよ。

これは困ったことですね。犬猫を介在して話ができるというので、ペットを飼ってますけどね。人生80年代ですから、長い人生を生きるのに、会話なしではとてもやっていけない、深刻な悩み相談です。

しかし、私たちが生きていくということは、実は、不快な他者と共に生きることなんです。ちょっと難しい言い方しますが、これこそ根源的な意味で人間が人間たらしめる条件であるということなんです。他者というのは、実は人間だけじゃありません。異文化とか、動物、植物、あるいは自然、環境。一番不快な他者と言ったら自然ですよ。コントロールが出来な

いですからね。暑いときは、こんなのやりきれんとか言って冷たいビールを飲むとか、涼しいところへ行くとか、いろいろやります。また寒けりゃ寒いで、温かい焼酎を飲む。そうして不快な他者と折り合いを付けて生きているのが人間なんです。それが人間らしいことなんです。しかし、その人間らしい生き方がみんな下手になってきた。不快な他者はみんな排除して、快適なものにしていくことが当然だと。折り合いを付けていく生活術を忘れてきたんですね。

考えてみますと、私たちが生きていくということは、偶然とか、予期せぬこと、また思い通りにならないことの格闘の連続ですね。不快なことといろいろ格闘しながら折り合いを付けて、うまく知恵を出して生きてきた。そういう不快な他者とどう折り合っていくかということが人間らしい生き方なんです。この点では昔の日本人は、知恵があったと思います。それらと折り合う過程で、いろんな物語を生み出し、楽しんでいたということです。

例えばこういうことです。日本の伝統社会では、世代間のバトル、戦争が起きないために隠居というものをつくり出していた。宮崎でもありますかね、隠居というのが。都市化されたところはもうないですけど、古い伝統社会では、跡継ぎが暮らしている母屋と程よい距離に老いた親が住む隠居をつくっていたわけです。隠居というのは、高齢者を隔離するとか、排除するというものではありません。家族の中心にいつまでも高齢者が居座ってはいならないという知恵の産物なんです。この付かず離れずの関係は、すごいことだと思いますね。高齢者は隠居になってしまったら引退したのか。そうじゃありません。祭りの時には長老として扱われて、存在感を示していたり、日常では、子育ての達人ですから子どもの面倒を見て活躍していた。そういう高齢者を、付かず離れずの距離と関係を置いて、一家の平和を築いていった。これはものすごい知恵ですよ。

今はもう、年寄り年寄りで住んで、子どもは離れたところに行って、みんな孤立化して生きている。先ほど言いました、子育ての未熟な若い親は経験がないから、赤ちゃんがわんわん泣き出したら止めようがない。でも年寄りは知っているんですよ。子どもがむずがってるのがどこにあるのか、優しい言葉かけをしたり、何か手当したら子どもはすぐ泣きやむ。子育ての達人ですからね。でも若い夫婦はそんなことは知らないから、ぶん殴ったり、足をつねったり、踏んづけたりして骨折させる。こういうことが起こっている。

これまでの日本の社会では、子育ては年寄りの仕事だったんですね。若い人は外へ出て働く。おじいちゃん、おばあちゃんが孫を育てていた。これが核家族になり、それが全くない。地域に高齢者がいても、その高齢者は大事に扱われていない。だから、子育ての知恵が伝承されていないんですよ。

この快適さの追求は、こうした知恵を失わせるばかりか、日本の文化を薄っぺらくしている。

こういう物質的な満足と快適さの追求によって日本はどんどん進んできたけれども、今これが限界になっている。これをどう変えていくかが、これからの私たちの課題になります。

それじゃあ、この生きにくい社会から生きやすい社会へ変えるための、そのヒントを少し考えてみたいと思います。

イギリスの作家のジョージ・オーウェルという人がいます。この人は、「人間の生きやすい社会は、思いやりの態度と正義のある社会である」と言っています。

思いやりの態度というのは、他者への配慮ということですね。横文字で言えば、「care(ケア)」ということです。こういう「ケア」のある社会と、正義、これは不公平を無くすということ。人間的な意味で、いつも何が正しいかを考えている社会に、人間らしい配慮が加わると、例えば苦しい時代があっても、人は生きていくことが出来る。こういうふうにジョージ・オーウェルは言っております。

他者への配慮。これは「ケア」と呼ばれておりますね。この「ケア」という言葉は、日常生活の中でもよく使われるようになりました。ヘルスケア、ボディケア、スキンケア、これらは化粧の分野ですね。こういうふうな一般に使われるようになってきました。それとあと大きな地震や大きな災害があったり、大きな事件や事故があった時に、こころのケアが大事だということで、ケアをする専門の人が送り込まれたりする。「ケア」という言葉はポピュラーなものになってきたということです。

「ケア」という言葉は、一般的によく「介護」とか、「介助」と捉えられておりますけれども、これをもう少し広く考えていた方がいいと思うんです。さきほど「配慮」と言いました。それに「気遣い」、「世話」、「手入れ」あるいは「手当て」というケア。例えば、お医者さんが診察するときに、手当てをすと言いますね。これは、医者が患者のからだに手を当てる、ここから医療行為が始まる。こういう配慮・気遣い・世話・手入れ・手当て、こういうふうな幅広い考え方が、「ケア」という言葉なんです。

これは元々、「お互いの存在に根ざした関わり」のことなんです。つまり、「関わり合いを通じてお互いが少しでも幸福になっていこうと目指す実践」を、「ケア」と呼んでいるわけです。

人間はひとりで生きていくことはできません。自分自身の生というものを生きる一方で、他者と関わることで生きている。これが人間なんですね。

人間の命というのは命というのは相互提供的なものであると言われます。つまり、お互いに育み合っている関係が、命のあり方です。自分ひとりでこの世に生まれて、この世に生きているというのはありません。他人によってケアされ、また自分もケアしている、そういうのが人間という存在です。自分自身をケアし、他者によってケアされている、これが「ケア」というものである。ですから特定の職業、例えば施設の職員の方のような仕事、あるいは病院の医師、看護師さんのような仕事だけじゃないということです。あらゆる人が日常生活の中で「ケア」を実践しているということが出来ると思います。

「手入れ」という話をしました。庭の手入れとか、里山を手入れする、これも「ケア」ですね。一番わかりやすいのはお化粧ですね。毎朝女性の方は、朝起きて大抵の人がお化粧されます。これはまさに「ケア」なんですね。

だいぶ前ですが、大阪の天王寺から電車に乗って和歌山まで行く用事があって、特急列

車の自由席に乗ったんです。そしたら、前に女性の方が座られて、電車が動きだしたら、持ってきたボックスをパカッと開けたんです。ぼくは新聞読みながら、何をされるか見てたんですね。そしたらまずクレンジングで顔を拭かれるんですよ。次にファンデーションを塗られて、すごいなと思ってのぞき見をしていました。そのうちすごいことが起こったんですよ。天王寺から和歌山に行く電車は振り子電車で、特急は振り子のようにして走ってスピードをあげるんですよ。これが揺れるんですよ。その方は口紅をし、眉毛も書かれるんですよ。まつげをビュッと上げられて、和歌山駅に着いたら、別人が前に座っておられるんです。来た時はすっぴんで来られたんですけどね。これは手入れ、ケアなんですよ。

普通は、私たちは朝起きて、歯を磨き、顔を洗い、ひげを剃ったり何かしますよね。朝コーヒを入れて音楽聞くのも、みんなケアなんですよ、これは日常的事務なんですよ。だからこのケアというのは、特別な人の仕事とかではなく、みんなケアをして、生きている。これが人間なんです。

それでは、この「ケア」は、最近私たちがやり始めたことかと言ったら、そうではない。古い歴史があるということ、ちょっとお話をしたいと思います。

黒海沿岸にグルジアという国があります。ここで発掘されたおよそ180万年前の原人の化石が出てきたんです。それを調査すると、歯が全て抜け落ちた状態で生き延びた原人の化石が出てきたんです。

これは2005年のイギリスの科学雑誌「ネイチャー」に発表されておりました。その原人が生きていた頃の食生活というのは肉食なんです。だから歯がないということは、大変なことですよ。多分高齢か病気が原因で抜けたんじゃないかと言われていますが、おそらく死ぬ数年前には、歯が全くなかったんじゃないか。そういう状態の頭蓋骨の化石が出てきた。分析した科学者は、この状態で主食の肉を噛むのは当然難しいだろう。誰かが食事を柔らかく下ごしらえして食べさせたんじゃないかと推測しているわけですよ。これは、人がいつ頃から他者をいたわる行動を始めたかを知るうえで、ものすごく貴重な発見だと思います。

古代人の他者に対するいたわりは他にもあります。例として、10万年から20万年前のネアンデルタール人が、病気の子どもを親が看病していたと見られるケースも出てきています。また死者を悼むために、亡骸の上に花をかけてうずめたというケースも出てきた。何でそれが分かるかという、その花は遠くから採ってきた。花粉とか種が残っているから分かるんですよ。そこでは咲いてない花を、わざわざ死者のために採って来て、いたわる気持ちを表したと。ですから、弱者をいたわる行動というのは、今日の「ケア」という実践ですが、太古からということなんですよ。

生物というのは常に競争して、環境に適合して勝ち抜いた者だけが生き残る。あとは自然淘汰される。これがダーウィンの進化論ですが、私たちもそう学校で学びました。しかし今、そうじゃなくて、生物は優勝劣敗で進化してきたのではなくて、お互いに助け合いながら進化してきたとする、共生的進化論が主流になっております。

このあいだ読んだ本のなかに、アフリカのケニアの湖のそばで発見された150万年前の類人猿、つまり人間の祖先と考えられる類人猿の遺跡調査の報告が出ておりました。食べ物を分かち合い、助けあって暮らしてきた痕跡がそこに残っていると。だから人類は、誕生した時から、相互扶助、分かち合い、それを本来の特性として持っていたから、私たちが今日あるということなんです。

競争心とか、権力志向とか、こういうものが今言われておりますね。でもこれが大事なことかという、長い人類の歴史を見てきたら、そうじゃないんじゃないかということです。それでは社会の対立が出てくる、あるいは抗争、争いごと、分断が起こる。これはもう人類の進歩とは相容れないことですね。

助け合い、譲り合い、分かち合い。この3つの「合い」が本当の進化の原則であるというのは、正しいんです。これを社会づくりの基にしていくことが大事で、そういう教育を学校教育でやらなければいけないわけです。成績が一番になることを目指せと言うんじゃないで、助け合い、譲り合い、分かち合い、こういうものをしっかりと教え込むことが、学校教育の一番の基本なんです。

コンピューターの実験で、どんな人が最後生き残るかという、そういう推測させる実験をやった。そしたら、自分のことを優先させて考えている人か、あるいは競争に勝ち抜いていく人か、こういう人が最後は生き残るんじゃないかという大方の予想を裏切って、譲るころを持った人が最後に生き残ると出たんです。

これは実はね、実際に歴史にあるんです。ヴィクトール・フランクルというユダヤ人の哲学者がいます。この人はアウシュビッツに送られたが、命が幸運にも助かった人なんです。『夜と霧』という有名な本を書きました。生き残った自分のことを哲学的に考察されていて、非常に貴重なことが書かれています。1つは先ほどの譲る心です。譲る心を持った人が最後まで生き延びられたということ。もう1つは、芸術文化を愛した人が生き残ったと。これは私たちにとっても学ぶべきことが多いですね。勝ち抜いてひとり勝ちする。こういう人はそう生き残れないというんです。私たちはこういう歴史の教訓を学びながら、これからどういう生きやすい社会をつくるかを考えていくということ。つまり、「ケア」というのは、これからの社会づくりの中の基礎になるということです。

さて、話を元に戻しますと、「ケア」というのは、強い者から弱い者へという一方的な営みではないということなんです。主体と他者という、つまり、ケアする人とケアされる人が、時として入れ替わる存在の相互性、存在がくると入れ替わるというのが「ケア」の特質であると言われております。

昔、重度の心身障害児施設で働く女性から、こんな体験談を聞いたことがあります。彼女の毎日の仕事は、寝たきりの子どもたちを世話することなんです。食事から排泄の処理、入浴と、全面介助をずっとしていた。彼女は非常に仕事熱心で、子どもを一生懸命世話して、評判もよくなって、高い評価を受けていた。その彼女がある時、子どもたちの世話をしている時に、ふと考えたんですね。この子には生きる価値があるのか。声も出ない、表情もない、

ただ生きているだけ。そういう子どもは生きる価値があるのか。そして、そういう子どもを世話している自分の仕事は、どんな意味があるのか。彼女はそういうふう思ったんです。そしてある時、彼女は男の子の下の世話、おむつを交換する仕事をやっている時に、あっと気がついたんです。その男の子の細いやせ細ったおしりが、おむつを替えようとしたら、浮いてるんです。力いっぱい浮かしてるんでしょうね。

それを見て、彼女びっくりしたんです。それは、意思が伝えられない男の子の彼女への配慮なんです。そして、それは言葉の出ない子が何か伝えたいと思って、ずーっと前からやってたんじゃないか。ただそれに自分は気がつかないんじゃないか。その子どもをいとおしく思い、彼女の心は揺れるんです。

ケアする人は、ケアを必要としている人に、何かをしてあげたいという、一方的な思い込みがすごくあるんです。ほっとけなくなるんです。何かしようと体が反応するんですね。熱心な人ほど、その思いにとらわれて、ケアから自由になれない。

しかし、ケアというのは、癒す者が癒され、癒される者が癒すという存在の相互性。わかりやすく言えば「反転」があるということ。強い者が助けてあげるだけがケアではない。相手からも何かをいただけることもある。こういう循環が、「ケア」の本質なんです。援助する者が援助され、援助される人が援助する。これがケアなんですね。

ケアに熱心な人ほど、ケアから自由になれないと言いましたけれども、ケアをやっている、いろんな思いが湧いてくる。例えば自分の存在が、他人の中でポジティブな意味、つまり、役に立ってないと気づくことほど辛いものはないんです。自分は、いてもいなくてもどっちでもいい存在だと、思い知らされることほど辛いものはないんです。

ですから、「ケア」というのは、自分の存在を理解してくれる存在がお互いに必要なんです。そこから一緒に生きよう、生きたいという能動的な思いが湧いてくるのです。

「ケア」では、自分たちは誰かに見守られている、関心を持たれているということで、個というものが際だたせることもあります。けれども、それ以上に大事なことは、他者に関心を持つということなんです。

関心を持ってもらうだけだと、支えにはなるけれども、やっぱり受け身なんです。生きがいは、自分の存在が他者の中で意味あると感じるところから生まれる。ケアという営みは、他者に何かをお返ししようという能動性に賭けることが、ケアの神髄ではないか。

子どもがお尻を持ち上げたという話は、そういうことを教えてくれているように思うわけです。

しかし、ケアに関わっている人は、利用者や家族と向き合い、常にとまどい、分からなさ、悩み、後悔に襲われ、無力感に陥る。こういう経験をみんなしています。このような経験は、いわゆる「揺らぎ」という言葉で捉えられています。

一般的にこの揺らぎは、好ましくない経験と考えられております。しかし、そうでしょうか。利用者一人ひとりに向き合う。その一人ひとり生活が違います。みんな異なっているわけです。あるいは、生きる感覚も違いますね。価値観も多様です。その中でケアに関わってい

る人が、分からなさや戸惑いを経験することは、きわめて自然なことなんです。

ケアに起きる揺らぎというのは、求められているものと自分との間に力の差がある時に、しばしば起こると言われております。しかし、揺らぎというのは、別の意味では専門性を高めたり、発展するための原動力にもなるんです。

介護職で揺らぎの経験を持った方がずいぶんおられます。その人たちが悩んだり、無力感に陥ったりした話をします。けれども、その揺らぎを通して自分は成長した、と言う人が意外と多いことにびっくりします。みんな揺らぎながら超えていく、いろんなことを学びながら超えていくということですね。

ぼくは人生で揺らぎの無い人というのは、あまりおもしろくない人だと思いますね。むしろ、揺らぎのある人ほど人間的な魅力がある。また人間を大きくしていくことが出来るんじゃないか。今日は時間の関係で端折って言いますが、揺らぎの対処法というのはやっぱりあるんです。介護を長くやってきた多くのベテラン介護職や家族にヒアリングすると、揺らぎの対処法というのはありますね。

1つは、揺らぎを否定しない。出来るだけ揺らぎを肯定していくこと。心の中でいろんな葛藤がありますけれども、それを否定しない。むしろ受け止めていくことが非常に大事だと。

2つめは、揺らぎと向き合っていくことです。確かに揺らぎの最中は混乱することもあります。向き合っていくことから人間の成長が起こるということです。また、この揺らぎを相対化、つまり多様な見方で捉えていくことですね。だから同僚のアドバイスとか先輩のアドバイスが、ものすごく大事なんです。

高齢者施設の介護の研究者を囲んで勉強会をした時のことです。若い男性の方がこういう質問をされたんです。高齢施設では亡くなっていく人のお見送りというのがあります。一生懸命世話してきた人が亡くなった時に泣いてしまった。それはどうなんですかと。普通、介護職のプロは泣いちゃ駄目と言われている。陰ではいいけれども、人前では感情を押し殺すんです。しかし、お世話していた人が寿命がきて亡くなられた時に思わず泣いてしまった。これはどうなんですかと質問をされたんです。それに対して介護職のベテランの女性の方は、泣きなさい、感情を押し殺すことはありません、とアドバイスしたんです。泣くことによって、いろんなものが落ちていく。また、泣くことを見た回りの人も、心が洗われるような思いがしますから、思い切って泣きなさいと、アドバイスするんです。実践知ですよ。プロなんだから感情を殺して、シャシャツとしなさいじゃない。やはり悲しい時は悲しくなりましょう。それはあなた一人の涙ではありません。人の心も洗い流してくれる涙ですと。

こんなふうには、すごいこと言われるんです。ぼくら古い世代になってきますと、人前で泣いちゃいかんと教えられてきた、特に男子はね、泣いちゃいかん。こういうケアの研究をして、ケアは「感情労働」であることを一緒に学ぶんです。

また、揺らぎを続けます。

先輩、同僚、信頼できる人に揺らぎを聞いてもらう。聞く人も、その揺らいでいる人に寄り添って聞くことが大事ですね。それも勝手に解釈してはならない。ああ、そういうこともある

んですね、そういう感じ方もあるんですね、そういう思いもあるんですね、なるほどと、寄り添って聞かなければならない。丸ごと受け止めてあげる。でもぼくはかつて新聞記者をやっていたので、それで、どこが苦しいの、どうして？ と聞いてしまう。これでは、相手の言葉が止まってしまいます。心を閉ざしてしまいます。でも、丸ごと受け止めるということは大変なことなんです。受け止めたら自分も揺らぐことになるから、簡単じゃない。相手も揺らいでいるし、聞いた自分も揺らぐ。そこに何か生まれるんですね。それが心が通じ合うということだと思いますね。

今ケアというのは大きな問題を抱えている。1つは孤立化の問題です。人間関係が希薄になっている。共同体もばらばらです。昔のように支え合おうというのは無くなってきた。そして人間は弱いですからね。みんな無力感を感じている。ここが実は大きな問題なんですね。

ケアとは、マイナス感情とプラス感情が必ず起こります。マイナス感情というのは、1つは無力感。ケアというのは相手と向き合うということですから、日常的な介護をされていたら、自分が日々試される。根底から揺さぶられるような厳しい営みが日常的にあるということなんです。その時に、この苦しみは誰も分かってくれないんじゃないかという、孤立感が生じる。それと、私だけが何でこんな苦しいことを背負わなければならないのかという被害者意識。また、この苦しみはいつまで続くのかという不安感、満足なケアが出来ていないんじゃないかという罪悪感。これがケアにおけるマイナス感情なんです。

これが高じてくると、肉体的な負担、精神的な負担ふたつが重なってストレスになります。ストレスが高じると心と体がおかしくなって、心身症というのが起こる。睡眠障害、過食症。こういった心身症が体の異変として起こる。あるいはむなしい、寂しい、やる気がなくなる、こういう心の鬱状態になる。さらには、バーンアウトと呼ばれる燃え尽き症候群。こういうケアのマイナス感情がこうじて、苦しくなるということですね。

でも、ケアというのは、苦しいもの、つらいもの、報われないものという負のイメージを多く持たれていますけれども、たくさんの方に話を聞いているとそうでもない。ケアするしんどさを引きずりながら、それを乗り越えて、ポジティブに生きている、そういうイメージを持っている人が意外と多いということが分かるんです。

確かにケアする人にとっては、肉体的な負担、精神的なストレスは、計り知れないほど大きい。また、人間関係のしがらみとか、葛藤で大変な思いを持っている人はいっぱいいる。けれども、ケアをしながら、生き方を学んだとか、生きる勇気をもらったとか、強く生きられるようになったとか、人生の糧を得たとか、と語る人が多いのも事実なんです。悲しみの涙もあれば、喜びの涙もあるということなんです。で、他人が生きていくことに向き合って生きること、それを通して、真摯に向き合ったという自信とか、あるいは達成感とか、そういうものを得ていることに気が付くわけです。

ですから、ケアは大変だ、苦しいもんだ、つらいもんだ、割に合わぬ、報われるものではないと言われるけれど、ケアする人は目に見えないものをいっぱい得ている。そして人間とし

てひとまわりもふたまわりも大きく育っているんです。そして、新しい命のつながりを発見して、人間と人間の信頼を回復している。

これは面白いんですけども、何か苦しいことがあってへこんだら、すぐ回復する人と、回復しない人がいるんですね。それはいったい何なのか。一言で言えば心の体力がある人と無い人の差だと思うんです。介護にはストレスとかいっぱいあるけれども、それをはね除ける心の体力みたいなものを持っている人はすごいということです。心が病んだ時は、心療内科や精神科のドクターとか専門家の助けを借りるということも非常に重要です。けれども、心だけを見て、心のケアをしたら済むというものではありません。へこまない人へこむ人を見ていて、心の体力のある人とは、生活のケアとか関係のケアがうまくできている人なんです。

この生活のケアというのは何か。それは全ての面でバランスが取れているということなんです。回復が早い人は、趣味とか道楽とかそういったものを持っているんです。冒頭にちょっと言いました重度の男の子のおむつ替えてた人も熱心で、仕事ばかりしていました。ところが、友だちに誘われて陶芸サークルに入ったら、いろんな見方ができるようになった。道楽の中でいろんなものが見える余裕が出てきたということですね。仕事一辺倒の時は、ささいな動きが見えなかったんです。それに熱心で真面目な人ほどポキッと折れやすい。生活のバランスが崩れている人は、家族とか友人の関係もだめです。

バランスが取れている人は、いっぱい友達がいて、比較的経済状態も安定して、心身とも健康です。あるところでストレスがかかってポキッと折れたけれども、他の側面でそれをカバーできるエネルギーがあるんです。つまり、心のエネルギーを多方面で確保できていることが、心の体力になるということ。だから道楽や趣味、友だち関係、家族関係、経済状況を整えていくことが、心の体力を付けることになる。

もう1つ、関係のケアですね。これは、コミュニケーション能力のことです。マージョリー・スワンソンという生物学者が、生命体の存続に不可欠な要素は、水と空気と食物とコミュニケーション、この4つだと言っているんです。スワンソンは、コミュニケーションを人間のあつたかさの交換であると定義しています。相手に触れること、やさしい言葉がけ、笑顔、こういうものが、あつたかさの交換に非常に重要だと。命のあるもの、特に人間が生き続けるためには、こういうあつたかさの交換をしなければならないと言っております。

現代人は今コミュニケーション能力が落ちています。携帯、パソコン、インターネット、こういうものでコミュニケーションをやっているように見えるけれども、生身のコミュニケーションは全く進んでない。韓国でびっくりした話。インターネットやパソコン、すごく電子化が進んでいます。家にいながら家族の会話をパソコンとか携帯でやっているというんですね。日本もそうなると思いますね。親子の会話でも、みんなメールやっているでしょう。うちのスタッフもメールが主流です。けれども生身では話ができないですね。ぼくなんか、自慢じゃないけど携帯もパソコンもやってない珍しい人種です。そのかわり、人とふれあったり、話をするのは、濃密にやっています。確かに携帯は便利なんです。でも生身のコミュニケーション

力は落ちてしまう。

このあいだ「たんぽぽ」で「言語から身振りへ」というプロジェクトをやったんです。今、介護施設とか高齢者施設はみんなコミュニケーションが言語なんです。言葉でやっている。でも言葉は、ほんとにわずかしか伝わらない。一番多く意味を伝えているのは、身振り、仕草、立ち居ふるまいなんです。そこで施設の職員は、身体表現を読み取る能力を付けたほうが良いと考えたんです。

あの高齢の人は今日苦しそうにしている、あるいは精神の人がどう見ても落ち込んでいる。そのように、心のありようを身体から読み取れるような能力を磨きなさい。

どうしたら磨けるのか。そこで考えたのがダンスワークショップでした。高齢の方にダンスを教えるのではなくて、職員にダンスで表現を読み取ることを学んでもらう。初めはみんなこわばって、硬いんです。一緒に体をほぐしていくと心もほぐれていき、表情がぱっと変わっていくんですね、柔らかくなってね。これを高齢の人たちのコミュニケーションに活かしていくという、そういうワークショップです。これは面白かったです。私たちは言葉だけで生きていますが、身振り、仕草から読み取る、身体から読み取ることも非常に大切です。特に介護の現場は必要ではないかと感じました。ダンサーも自分のダンスをこんなことに活かせるのかと驚くんです。

私たちは芸術的ケアとか文化的ケアを奨励しています。これは何かと言うと、ケアの現場に芸術とか文化の持っている力を活かしていこうということなんです。アートがケアと出会う「アーツミーツケア学会」をつくりました。関西では「アート見つけてや学会」と言うんですね。

なぜ、この芸術的ケア、文化的ケアが必要かという、かつて「医療の中で患者のオートノミーを考える」、いわゆる患者自身が自律的に病気と向き合うという研究会をやっていました。ドクターとか、看護師とか専門家が集まっていて、そこにぼくが市民代表で入って、これはいい勉強会でした。大阪大学名誉教授の中川米造さんがリーダーで、この人は非常に先駆的な方で、日本で最初に芸術的なケアとか文化的なケアを説かれた方です。その人が面白かった。「播磨さん、日本の医学教育は間違ってますよ。医学教育の初めは人体解剖から始まる。人間はものなんです。最初からものとしてしか見てない」と。

この中川先生が、「病気というものは、病者の中にこわばりが起こる。こわばりが起こると、こだわりが始まる。こだわりがさらにこわばりをつくる。この悪循環が病者を悪くしていく。病気のイメージがどんどん膨らんでいって、病者を圧倒してしまう、これが病気の本質である」と言うんです。すごくいいことを学びました。

中川先生の言ったことを具体的に見てきた話をします。1996年、ぼくはアメリカにNPOの調査に行き、その帰りにデューク大学で開かれた、アーツ・イン・ヘルスケア学会の大会に参加してきました。

なるほどと思ったのは、病室に絵をデリバリーするプロジェクトです。スタッフが絵をカートにいっぱい乗せて、病室を訪ねていくんです。「自分の好きな絵を選んで病室に飾りなさい」とすすめると、患者が「この絵飾りたいです」と選ぶ。「この絵は川の風景ですね。なぜこれ

を選んだんですか。「ぼくのふるさとはミシシッピー川のそばで、こういう風景が見たい」。「いいとこで生まれたんですね」と、話しながら病室に飾るんです。

ここでもう治療が始まっていると言うんです。何故かと言ったら、病気にかかった人は、病気のことで頭いっぱいなんです。先どうなるの、もっと悪くなるのじゃないかと。そんな時に、全く違う話、ふるさとの話をするわけです。このような、そこでの会話がちゃんと記録されているんです。中川先生が言った、こわばり、こだわりを、絵を選択して絵を飾るところからほぐしていく。つまり病気にかかっている人が、病気以外のことにも気がまわるようになると回復が早くなる。

日本でも今、ホスピタルアートが盛んになりましたが、まだまだです。こういう話を病院の経営者にしたら、うちの病院も絵を飾ってますからって言うんです。どういう基準で選んでおられるんですか聞いたらね、大体院長夫人の趣味です。高い絵もあるらしい。でも違うんです。患者が自分で絵を選んでいくことで病気以外の気持ちが生まれてきて、病気から自由になっていく。それが治療に役立ち、回復も早くなるということですね。こういうのが、芸術的ケア、あるいは文化的ケアの良さなんです。

それともう1つ大事なことがある。聖路加病院名誉院長の日野原重明先生の「100歳」のドキュメンタリーをテレビでやってました。いちどパーティーで一緒になったことがあるんですけど、あんな100歳いません。ぼくらすぐ椅子に座るのに、あの人はパーティー中立ち歩いてるんですよ。そのドキュメンタリーで、日野原先生が往診に回ってる時に、「あの患者は回復します。笑顔がありますから」といってました。大事なのは笑顔なんですね。芸術的なケアと文化的なケアの目的は、笑顔をつくることなんです。これは楽しいな、面白いなという笑顔です。特に障害のある人のアートはいいです。みんな笑顔になっていくんですね。笑いの治癒力と言われます。

ケアというのは、お互いに関わり合って、みんなが幸福になっていく実践的な営みと言えますね。つまり、みんなが笑顔を生み出す関わりがケアなんです。みんな深刻な顔をしていたら、状況はどんどん悪くなってきます。

余談になりますが、日野原先生の笑顔ある患者は早く回復するという話を聞いたあと、「笑っていいとも」という昼間の番組見ていたら、宝くじで億を当てた人が出ておられて、それを当てるクイズをしていました。共通点1つあるんです。笑顔のある売り場で買えと。売れ残ったら困るなという顔をしたところは駄目。笑顔のあるとこで買え。それが億万長者の秘訣なんです。

この笑顔の力はものすごく大事。だから、こういう施設でもいつも笑い声が聞こえる、あるいは笑い声が生まれるような施設をつくっていくことが大事なんです。

さて、今日は家族会のみなさんの集まりだと聞きました。精神医療は、今大きく変わろうとしていますね。つまり、病院を中心にしたものから、コミュニティの中で回復する場をつくっていく方向に移ってきた。これが、今の大きな流れですね。去年、韓国の精神医療をやってる

人たちと「生き延びるためのアート」という展覧会をやりました。彼らコミュニティ・ケアに取り組んでいる人たちです。

私たちは今、まずは、セルフヘルプ・グループをつくりなさいとすすめています。同じ立場の人たちが集まって、孤立せずにグループをつくって、共通のものを見出していくという。その作り方についてアドバイスしたり、あるいは先達のグループを紹介したりしています。地域の中で孤立せずに、セルフヘルプ・グループづくりからまず問題のきっかけをつかんでください。

2番目に、やっぱり居場所づくりですね。出来るだけ通える距離で居場所をつくっていくこと。それも、開かれている場所にしていく。精神障害の人ばかりが集まって肩寄せ合うんじゃないなくて、いろんな人が行き会うような居場所づくりをやっていく。京都でも、ホットステーションというのをNPOがやっていて、1階は居場所、2階はアートを自由にやれる。全国でコミュニティカフェみたいなものが生まれてきています。韓国でも京畿道(キョンギド)で精神障害の人のカフェが街の中にあるのを見せてもらいました。そういう居場所をつくるということが非常に重要です。

もう1つ、支え合う仕組みですね。仕組みをつくるのに重要なのは、ソーシャル・キャピタル、社会関係資本です。まずは血縁、地縁というつながり、支え合う心のつながり。あるいは、趣味の会とか同好会とかいろんな関心を持つネットワークの連帯感とか信頼関係、こういったものを活かすことです。日本の福祉は困り込んでやる傾向が強いんですが、開かれたものにしていくこと。そして地域の中のいろんなつながりとか支え合う心とか信頼関係、連帯感というものを、活かしていくことが非常に重要です。日本にNPOが生まれて10年ちょっとですが、日本のNPOはソーシャル・キャピタル、社会関係資本の使い方を全く知らなくて、行政から助成金を貰うことばかり考えている。社会資本は無形のものですが、それを公共財として使いこなすことは、重要になってきます。

私たちの「たんぽぽ」も、35年を越えましたが、ここまでいろんなことで伸びたのは、社会にあるいろんな力や知恵を使ってここまで来たということです。だから、居場所づくり、支え合う仕組みづくりに活かしていただきたい、と実践知の分かち合いに努めています。

ということで、今やっているのは、医療・介護情報誌の発行です。地域で孤立化している人たちは情報を知らない。社会関係資本とか社会資本いっぱいあるのに、それも知らない。だから、そういうデータを収録した介護情報誌を発行しよう。これすごいんですよ。無料配布してる。1年に1回、今5万を目標にしてる。この資金は、地域の病院とか施設とか、あるいはお店とか、企業にお願いして広告を出してもらっている。小さいところもみんな協力してくれて、これ貴重なんです。

あともう1つは、インターネット放送。これはどうぞみなさんアクセスして下さい。介護の情報始め、地域の情報、生活の情報、文化の情報、パソコンで見たら流れている。ケアの文化、ケアのある社会をみんなで作っていきこう。現場でやられてきたことの知恵を集めて、住みやすい社会を作っていこう。これをみんなで作っていきましょうと、インターネット方式で

というのを考えた。このあいだ見ましたけど、面白いですよ。何が面白いかといったらね、素人で介護レシピの料理教室をやっているんです。素人がやっているから、テレビの料理番組のようではないんです。普通のテレビ番組やったらきれいに編集されてね、パツパツパツと5分ぐらいで料理が出来ますけど。

大事なことは、国・行政や政治が住みやすい社会をつくってくれるのを待っているんじゃなくて、一人ひとりが立ちあがって、住みやすい社会をつくるということなんですね。それに参加していくことなんです。

東北の震災で、こんな声が上がりました。わたぼうしコンサート、音楽祭を36年やっていて、アジアにも広がってます。それに応募してきた障害のある詩人たちから、東日本大震災で私たちに出来ることが何かないかと。障害を持っていても、出来ることは何かあるはずだ。それで、被災地のみなさんに元気づけたり、勇気づけたり、励ます詩を書いてくれと呼びかけたんです。それで、福島原発の詩をツイッターで書いていることで有名な和合亮一さんらに選考してもらって。さらに仙台の絵画教室の子どもたちが読んで、イメージをした絵を描いてくれて、『言葉のちから』という本にして、被災地の人に無料配布することにしました。これもお金が必要ですから、2冊買ってもらって、1冊は被災した人に無料であげて、1冊は自分のものという仕組み。あっという間に3000冊が無くなって、評判が良いんですね。今まで障害のある人は、何かしてもらおう立場なんですよ。でも違うということを言い出した、自分たちで出来ることをしたい。すごい、このことは。

ぼくは障害のある人たちも、周りから何かしてもらおうことが当たり前じゃなくて、何か自分でも出来ること、世界に何かを贈与する存在になろう、と。これは長く言い続けてきたことなんです。

今は生きにくい社会ですけども、ぼくは絶望はしておりません。みんな介護、介助、ケアの日常の現場からいっぱい希望を見つけております。それをどう組織するかということが、これからの大きな課題ではないか。それも誰かが組織するんじゃなくて、みなさん一人ひとりが出来ることをいっぱい集めて、生きやすい社会にしていくのが一番の道ではないかと思えます。

日本はGNPということで、経済成長ばかりを考えてきたけれども、これからは幸福度を国づくりの柱の1つにして、やっていくということが求められています。

このあいだ国家戦略室の古川大臣が発表しましたね。幸福度を基本に、国づくりを始めると。それで、幸福度の主な指標は、「経済社会状況」、経済的な状況はどうかですね。あるいは「心身の健康」、自殺者とかが無くなって、医療介護のサービスが充実しているかどうか。そして、3番目が、「家族や社会との関係性」ですね。これはもうケアの世界ですね。こういうものを中心にして、日本の国を変えようというふうなことが発表されていました。

みなさんが日頃やっておられること、決して無駄ではありません。実践知から生まれた知識、知恵が国づくりに活かされるよう、私たちも努力していきたいと思っております。

長い間ご静聴ありがとうございました。